

会議名	科学飼料協会第 385 回月例研究会 開催テーマ；「乳牛の栄養研究をめぐる最近の話題—泌乳曲線の改変により乳牛の健全性を増進する—」
開催日時	平成 18 年 11 月 29 日（水）午後 1 時 30 分～4 時
開催場所	馬事畜産会館 2F 会議室（東京都中央区新川 2-6-16）
主催者	社団法人 日本科学飼料協会
参加人数(概数)	約 40 名（主として会員団体関係者）
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>講師；農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所 畜産研究支援センター長 寺田 文典 氏</p> <p>牛群検定成績の全国平均は 9, 121[*]。(平成 17 年) に達しているが、平均産次は 3 産を下回り繁殖成績の改善が急務であり、乳牛飼養技術の研究開発に対し生産性のみならず、長命連産、健全性などの視点からの取り組みが求められている。また、最近の生乳消費減退から新たな需要開拓・拡大のためには一層の生産コスト削減が求められている。このような背景において、乳牛の栄養飼料研究は酪農の振興にどのように寄与していくのかについて、最近の内（主として技術会議研究プロジェクト）外の乳牛研究成果を基に下記のような内容により提供された。</p> <p>（話題の背景）・我が国における乳牛の泌乳能力の向上と飼料穀物輸入量の増加。 ・分娩間隔の延長と疾病発生率の増加・</p> <p>1. 乳牛の健全性を高める飼養管理技術に関する研究動向 ・泌乳曲線の平準化は可能か；（生産形質と繁殖形質の遺伝率と遺伝相関）、・給与飼料の違いは泌乳パターンに影響するのか？；（栄養よりも育種効果、低蛋白？）、・乾乳期間を短縮し、搾乳期間を延長してはどうか；（無乾連続搾乳は今後の研究課題）</p> <p>2. 飼料自給率向上推進にかかわる研究 ・乾物摂取量を高めることはできないのか？、・繊維成分の消化率を高める、・飼料イネ W C S の利用、・食品廃棄物の利用；利用マニュアルの骨子、粕類利用の基準、・ T M R センターの普及と発酵 T M R の利用、</p> <p>3. 高品質乳生産技術研究 ・高品質乳生産の課題；（エネルギー充足率の改善、蛋白質率の低下防止、暑熱ストレスの緩和、・乳肉に対する共役リノール酸投与は否定的、・暑熱時の乾物摂取量、・ストレス緩和効果を期待して給与するアントシアニン含有とうもろこしの選抜（プロ研成果）</p> <p>講師のむすび；持続安定性の高い経営を実現し、ゆとりある生活の実現ヒトと乳牛への負荷の軽減、福祉）、豊かな環境の維持・保全（環境負荷の軽減、飼料自給率）、耕畜連携、地域社会への寄与（新産業創出、活性化、食育）のためには多様な経営形態を守ること。高泌乳、高生産性指向からの脱却。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題</p>	<p>・報告者は、高泌乳牛の繁殖成績改善に栄養コントロールがどれだけ寄与できるかに期待した。その要因について講師は、いろいろ解析、研究成果も披露されたが、結論は「今のところ泌乳能力を下げるしかない」ということになり、期待はずれであった。しかしこれではあまりにも情けなく、今後、これを打破するような研究課題を期待したい。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>・紹介された研究プロジェクトを企画する段階から国内の育種分野の研究者の意見も聞いて研究計画を組み立てたとのこと、従来の研究課題設定ではあまり考えられなかった部分である。今後の組織的研究の企画においては、このような取り組みが期待される。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>・講師のむすびから、高泌乳牛の繁殖率向上のための飼養管理技術としては、高泌乳、高生産性指向からの脱却ということになる。しかし、現在の我が国の酪農は打ち寄せる貿易自由化の波に如何に立ち向うかが緊急の課題と考えられ、高泌乳牛による生産性向上による牛乳生産費の低下が技術戦略として期待できる。我が国の牛群検定成績の平均乳量は1万キロ程度であるが、高位記録牛は2万5千キロを超している。我が国が保有するこの育種資源を有効に活用する研究開発が必要と考えられる。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>・この月例研究会の出席者を見ていると、テーマが鶏・豚と牛の場合では顔ぶれに違いが感じられる。養牛技術開発についての民間活力は現在も、明らかに弱く感じさせられる。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>